

堤隆 著 『列島の考古学 旧石器時代』

中村雄紀*

本書は、全4巻で旧石器時代から古墳時代までを扱う「列島の考古学」シリーズ（河出書房新社刊）の第1回配本にあたる。著者堤隆氏は長野県北佐久郡御代田町の浅間縄文ミュージアムの学芸員であり、専門的な調査研究業務の傍らこれまでも『ビジュアル版旧石器時代ガイドブック』（2009年、新泉社刊）、『黒曜石3万年の旅』（2004年、日本放送出版協会刊）、『氷河期を生き抜いた狩人・矢出川遺跡』（2004年、新泉社刊）など旧石器時代を対象とした一般向けの著作を数多く発表されてきたことでも広く知られている。

さて、よく知られている通り日本列島の旧石器時代遺跡はごく僅かな例外を除いて石器・礫といった石製の出土遺物のみから成っている。これらの出土遺物は、おそらくは旧石器時代のシステムの全体ではなく一部を代表しているにすぎない。旧石器時代の社会・文化・生活などを復元するには、その根拠となる資料はあまりにも貧弱である。こうした資料状況に対して、日本列島の旧石器時代の叙述の仕方には幾つかのアプローチ法がとられてきた。例えば、（日本列島全体を対象としたものではないが）『新・北海道の古代1 旧石器・縄文文化』（野村崇・宇田川洋編、2001年、北海道新聞社刊）では発掘調査で実際に明らかになっている遺跡や出土遺物をもとに、時期・遺跡ごとに石器群がどのように変遷していったのかを叙述している。推測・憶測の度合いが高い記述よりも、実際に明らかになっていることを中心に客観的に記述したストイックな内容と言えるが、刊行当時の新聞の書評では「どのような石器があるのかは分かったが当時の人間の生活が分からない」といった主旨の苦言が呈されていたという。一方これと対照的な例が『日本の歴史01 縄文の生活誌』（岡村道雄著、2001年・改訂版

2002年、講談社刊）であり、推定復元された旧石器時代人・縄文時代人の生活の一齣を物語調で叙述した箇所を盛り込むという独自の手法がとられた。意欲的な試みではあったが、同書に対してはその「物語」（先史時代人の名前など、想像に基づく要素が多く含まれている）への違和感から（そして折しも発覚した捏造事件の影響もあって）批判的に見る向きも多かった。このように、旧石器時代を含む先史時代を一般向けに解説した書籍の執筆は一筋縄ではいかないところがある。

この困難な題材に対し、本書は「押し黙った石をしてどのように人間を語らしめるか」（5頁）という一文にもあるように実際の出土資料の記述にとどまらず、その向こう側にある日本列島の旧石器時代の文化や生活を見通すことに主眼を置いている。

そこでまず本書の具体的な構成と内容について触れておくこととしたい。本書を含むシリーズ各巻に共通することであるが、本書の構成は通史的な流れにそれほどとらわれず、その時代を読み解く上で鍵となるテーマや研究上の焦点となっているテーマごとに章・節を立てて叙述が行われていくものとなっている。

「1章 私たちはどこから来たか」は「偉大なる旅の果てに」、「日本列島の旧石器時代」の2つの節から成る。前半では現生人類の誕生と拡散、及び日本列島における旧石器時代の始まりの問題について述べられており、それを受けて後半では日本列島の旧石器時代に見られる石器の種類と石器群の編年についてまとめられている。

「2章 氷期の原風景」は「過酷な自然環境のなかで」、「狩猟採集という暮らし」の2つの節から成る。前半では古気候、古植生、古動物相を扱い、特にナウマンゾウ狩猟とその絶滅の問題に多くのページが割かれている。

* 明治大学黒曜石研究センター
cm119076@cmm.meiji.ac.jp

後半は狩猟を中心とした旧石器時代の生業について扱う。

「3章 石材資源を求めて」は、研究対象がほとんど石器に限定されざるを得ない日本列島の旧石器時代研究にあって人類の移動や行動パターンに迫ることのできる方法として注目されてきた石材研究に当てられており、「生命線を担う石材」、「どのように石が動いたか」の2つの節から成る。黒曜石、サヌカイトといった代表的石材とその原産地に関する研究、そして直接採取、埋め込み戦略、交換といった石材獲得活動として導かれる人類の移動の問題が論じられている。

「4章 技術と芸術に込められたメッセージ」は「石器の製作と使用」、「かたちとところ」の2つの節から成る。前半では石器の使用痕研究と石器の機能論、石器の製作技術などを扱う。後半ではまず埋葬儀礼や芸術表現の問題を扱い、また後期旧石器時代後半期に見られるナイフ形石器のスタイルの差と社会・集団の問題を扱う。

「5章 遊動する生活スタイル」は「キャンプサイトの風景」、「狩猟採集民のテリトリー」の2つの節から成る。セツルメント・パターンと移動戦略・領域の問題が主たるテーマであり、住居跡やブロックなどに見られる、旧石器時代の頻繁な移動生活における居住の場のあり方から、移動生活における行動パターンの研究までが触れられる。とくに、季節性標高移動仮説が強調されている。

「6章 新たな時代への胎動」は「神子柴をめぐる論争」、「さまざまな技術革新」の2つの節から成る。本書は神子柴系石器群の成立をもって縄文時代の開始としており、ここではその縄文時代開始期に焦点をあてて旧石器時代からの変化が論じられている。前半ではこの時期に特徴的な神子柴系石器群における石器の交換システムや象徴性の問題が扱われる。後半では土器の出現や石器群の変化、定住化といった縄文時代への変化が対象となっている。

総ページ数127ページで図版もふんだんに盛り込まれているため文章の量としては決して多くないはずであるが、それに比して取り上げられているテーマは多岐に及んでいる。石器の編年やタイポロジーなど、専門書では多くのページが割かれていそうなことについてもあくま

でテーマの1つとして短くまとめられ、それ以外の多彩なテーマにページが割り当てられている。結果としてこの6章で現在日本列島の旧石器時代研究において取り組まれている主要なテーマ、分野がバランスよく採り上げられており、研究の現状を知る上でよくまとまった見取図を提供している。著者は、本書の捏造事件について述べたコラムの中で「やみくもな「最古探し」の思考を改め、科学的批判精神を身にまとうこと」を事件が残した教訓としているが(51頁)、科学的な研究は何も最古の旧石器にかぎらず、旧石器時代研究全般に不可欠なものであることは言うまでもない。どこまでが確定された事実で、どの部分は高い確度で断定でき、そしてどこからは推論にすぎないのか。これらは厳密に区別されるべきことであるが、旧石器時代研究においては、資料が限られているが故にその境界線がぼかされてしまう恐れが付きまとう。本書では様々なテーマが取り上げられているが、それぞれどのような過程を経て現在の論点や理解に至ったのか、具体的な事例研究や議論の経過を挙げながら手際よくまとめられている。旧石器時代研究では、有機質資料や芸術表現、民族学的研究など、日本列島内に研究資料の乏しい分野も少なくない。このため頻繁に海外の資料を文章中や写真などで採り上げて解説している点は本シリーズの他の巻にはない特徴である。

本書の叙述は、基本的には客観的な姿勢で行われているが、細石刃石器群や使用痕研究など著者自身が研究に携わった分野に関しては経験に基づいた臨場感のある描写もところどころに見られ、細石刃石器群における季節的標高移動仮説など、著者の持論が展開されている箇所もある。このように本書は先進的な研究成果を取り入れつつも平易にまとめられているが、折しも本書の刊行後、著者の博士論文である『最終氷期における細石刃狩猟民とその適応戦略』(2011年、雄山閣刊)が上梓された。本書の内容を超えた著者の本格的な研究内容に興味のある方には併読をお勧めしたい。

書誌情報

堤隆 著『列島の考古学 旧石器時代』, 127頁, 東京, 河出書房新社, 2011年5月30日発行, 定価2,800円(税別)

(2011年12月21日受付/2012年1月18日受理)